

凡人による

凡人のための

新解釈

『般若心経』

樽井欣也

# 『Boon-gate』のPDF作品を ご覧いただく前に…

## 操作について

- 作品の多くは「もくじ」のページで、進みたいページの項目を押せば、そのページまでジャンプし、また、ジャンプしたページのタイトルを押せば、目次のページに戻るように設定しております。
- 直前に開いていたページに戻るには、画面上の「◀」ボタンで、直前に開いていたページに戻ります。

## 読み方いろいろ

- 通常は画面の「倍率」が100%前後になっていますが、「倍率」を150%まで高めると文字が読みやすい大きさになります。
- 通常は「見開きページ」で設定されていますが、「単一ページ」にすると読みやすく感じます。
- 読み進めるときは、「十字キー」を使用すると手軽です。
- 「サムネイル機能」を使用して読み進めると、2～3頁からとばし読みするのに便利です。
- 頁を「回転」させることが可能です。地図などを拡大して見るときに便利です。

[http://www.bungeisha.com/PDF is/05-top1.html](http://www.bungeisha.com/PDF_is/05-top1.html) でPDF作品についての説明を致しております。ご参照ください。

凡人による

凡人のための

新解釈

『般若心経』

樽井欣也



まず、自己紹介いたします。私は、自慢ながら（いや、一般的には、決して自慢できません）、「凡人」の三つの条件（地位がない、名誉がない、お金がない）を完全に充足しています。したがって、「大凡人」であると自負しています。この三つの条件のうち、一つを満たしていない人は「中凡人」、二つを満たしていない人は「小凡人」ということになりました。残念ながら（一般的には、幸いにして）この三つの条件をすべて満たしていないという人は、「凡人見習い」ということにおきましよう。

さて、私は、小学生の頃、漫画か何かで「孫悟空<sup>そんごくう</sup>」の物語を読みました。お釈迦様と孫悟空が出てくる、あの物語です。その頃は、お釈迦様がどんな人なのかはよく分かりませんでした。孫悟空は、「きんとうん」に乗れば、お釈迦様より速く空を飛べると自慢しましたが、どんなに速く空を飛んでも、結局、お釈迦様の手の中から出られなかったのです。こ

のことは、少年の脳裏のうりに焼き付きました。「孫悟空」というのは実は「ごさかしい人間」のことなのだということは、だいぶ後になってから知りました。

中学一年の時、きっかけは覚えていませんが、「悟りさとし」という言葉が妙になりました。当時、「悟り」というものは「偉いお坊さん」だけが会得えとくできるものなのだと、ぼんやり、思いました。その後も、「悟り」という言葉が、時折、頭に浮かびました。そして、世界四大文明の一つであるインダス文明はつしやう発祥の地であり、また、お釈迦様が生まれた「摩訶まか不思議な国——インド」に、いつの日か行ってみたいと考えるようになりました。

「強く願うと実現する」とか言いますが、私は、総合商社「日商岩井」に入社し、鉄鉱石部第一課に配属になりました。何と、その課は「インド」から鉄鉱石（鉄鋼の原料）を年間何百万トンも輸入していたのです。新入社員（男子）は一八〇人ほどでした。つまり、私がインドを担当するこの課に配属される確率は一八〇分の一という非常に小さな数字であったということになります。私は、他人には言いませんでしたが、お釈迦様から「インドに

おいで」と呼ばれたと思えました。そして、三十二歳の時、お釈迦様の生まれた国「インド」に滞在することになったのです。

しかし、その頃は、私の頭の中では、お釈迦様と般若心経は結び付いていませんでした。仏教の知識がなかったのですから、当然といえば、当然でした。四年半の滞在を終え、インドから帰国後、般若心経にはお釈迦様が得られた「悟り」の真髓しんずいが書かれていたということが分かりました。そこで、本屋さんに並んでいる般若心経の解説書を一〜二冊購入し、読んでみましたが、すっきりとは分かりませんでした。特に、般若心経の中間部分に関する解説が曖昧あいまい模稜もろうとしていたのです（般若心経の大きな謎）。そして、そのままになっていました。

四十五歳の時、日商岩井を退社し、英日・日英の翻訳たずさに携たずさわるようになりました。専門は、法律、経済、金融などです。それから十数年の月日が経過しました。毎日、毎日、締め切りに追われていましたが、ある時、般若心経が再び気になりだしたのです。そこで、再

度般若心経に関する解説書を数冊購入し、じっくり読んでみましたが、やはり、どれも「般若心経の大きな謎」の部分の解釈があいまいで、納得できません。

そのうちの一冊には、英国のある学者が原典のパーリ語（古代インドの書き言葉）（これは、もう一つの書き言葉であるサンスクリット語——日本では梵語ほんごと呼ばれている——に酷似くじしているといわれています）から英語に直訳したとされる英文が掲載されていました。「翻訳家の端くれはし」の私は、一読して「この英訳には般若心経の心が表れていない」と直感しました。「般若心経の心」を理解しないまま、文字だけを追って、縦のものを横に置き直したただだからです。こんなものに、「般若心経の英訳でございます」といって、世界中に出回ってもらっては困る。（東洋人を代表して）私は、そう、思ったのでした。

そんな伏線ふくせんがあったためか、ある時、「ならば、お前自ら、般若心経を解釈し、しかも、これを英訳してみよ」という天命を受けました（正確には、受けたと感じました）。「文句があるなら、自分でやってみろ」ということでしょうか。しかし、英訳するには、「般若心経の心」をほぼ完全に理解できていなければなりません。これは、「一生の大仕事になるか

も知れない」と思いました。何故なら、「般若心経には大きな謎」があるからです（この謎については、本文の中で徹底的に検討します）。

そんなわけで、「大凡人」自ら、解釈に挑むことになったというわけなのです。

この「凡人による凡人のための新解釈『般若心経』」は、大凡人の悪戦苦闘の結晶です。ただし、私は修行僧でもなく、仏教学に関する学者でもありませんので、それぞれの仏教用語の正確な意味については解説できません。というより、解説する資格はないと思います。これについては、修行を積まれたお坊さんが書かれた「般若心経の解説書」をご覧ください。ださい。私の解釈は、あくまでも、般若心経の文言そのものを「翻訳家の眼で、論旨と論理展開に重点を置いて解釈したもの」にすぎません。したがって、お坊さんが書かれた解説書と本書を併せてお読みいただければと思います。そうすれば、必ずや、般若心経をほぼ完璧に理解することができると考えます。

本書では、「お釈迦様はどのようなことを説かれたのか」、「般若心経の大きな謎と新解

「釈」、「般若心経の英訳」、「インドに関する随筆もどき」が主要テーマになっています。

凡人の私が「般若心経の心」を捉えて、漢文から邦文に正しく翻訳できたかどうか、また、その邦文を、般若心経にふさわしい格調ある英文に翻訳できたかどうかを判断できるのは、お釈迦様、観自在菩薩（観音様）、そして、読者諸賢であると考えています。ともあれ、このような大それた試みを実行するよう仕向けられたお釈迦様に感謝しなければなりません。

南無釈迦牟尼仏

〔目次〕

まえがき 3

第一章

お釈迦しゃか様について

お釈迦様の略歴 16

お釈迦様の生涯 18

お釈迦様の教え（ダルマ） 29

四つの真理 31

因縁いんねん 35

変わりゆくものには実体じつたいがない

42

最後の教え 47

## 第二章 般若心経について

摩訶般若波羅蜜多心経 55

般若心経の原典は、古代インドのサンスクリット語で書かれていた 56

誰が般若心経の原典を漢文に翻訳したのか 57

鳩摩羅什 くまらじゆう

57

玄奘 げんじゆう (三蔵法師) 58

般若心経は大般若波羅蜜多経を要約したもの 60

般若心経は、いつ頃、日本に入ってきたのか 61

## 第三章 今までの般若心経の解釈は誤っていた

般若心経の文言の検討 64

般若心経の大きな謎 82

何故、間違った解釈が行われてきたのか 89

般若心経の大きな謎の解明——新解釈 91

般若心経の構成と意図 123

三段階の悟りについて 129

〈初歩の悟りを得るための修行〉 130

〈さらに菩薩の悟りに至るための修行〉 132

般若心経に観自在菩薩が登場している理由 133

蛇足 134

## 第四章 新解釈に基づく般若心経の英訳 139

## 第五章 インドについて

インダス文明 148

アーリヤ人の侵入とバラモン教 149

ウパニシャッド哲学 151

ウパニシャッド哲学が示した業と輪廻の考え方 152

仏教(原始仏教) 154

六師外道ろくしげしやう 156

プーラーナ・カッサパ 158

## 第六章

### インド物語

- マツカリ・ゴーサーラ 158
- パクダ・カッチャーヤナ 158
- アジタ・ケーサカンバラ 158
- サンジャヤ・ベーラッテイプッタ 159
- ニガンタ・ナータプッタ（バルダマーナ） 159
- ヒンドゥー教 161
- ヒンドゥー教の神々と日本の神々 162
- （一） ブラーフマ 162
- （二） ビシユヌ 162
- （三） シバ 163
- 参考資料 165
- オールドデリーとニューデリー 170
- 「輪廻りんねからの解脱げだつ」を願って 174

働く女性向けの新雑誌、誕生！ 177

ファッション考 181

映画スターほど、すてきな商売はない？ 185

日常生活に欠かせない各種のムードラ 188

古典舞踊の表現手段として編み出されたムードラ 190

美しい墓は女の願い？ 192

首相令息の威光で事故も円満解決 196

中近東、出稼ぎブルース 199

無知なるが故に……

——極貧階層に見る、インドの罪と罰 203

「遊び」を知らない子供たち 207

「まされるたから こにしかめやも」 211

あとがき 214





第一章

お釈しゃ迦か様について

## お釈迦様の略歴

まず初めに、お釈迦様がいつ頃の時代の人なのかを知っておきましょう。『世界大百科事典』（日立システムアンドサービス社）などによると、次のような人物であったことが分かります。

『仏教の開祖<sup>かいそ</sup>。釈迦は、サンスクリット語のシャークヤムニの音訳。死亡年は、紀元前五〇〇年頃とも、四〇〇年頃とも言われているが不明。但し<sup>ただ</sup>、八十歳で死亡したことは定説とされている。インド・ネパール国境沿いの小国「カピラバストゥ」を支配していた釈迦族の王、シュッドーダナとその妃<sup>めかけ</sup>、マーヤーの子として生まれた。姓はゴータマ（釈迦族全体の姓）、名はシッタールタ。生後七日目に母を失う。以後、叔母<sup>おば</sup>（養母になった）に育てられる。長じて、ヤシヨードラーを妃とし、一子のラーフラをもうけた後、ある夜、愛馬カンタカと御者<sup>ごしや</sup>チャンダカを従えて城を脱出。マガダ国で修道者の生活に身を投ずる。そ

して、六年間、苦行くぎやうしたが得るものはなかつた。村娘スジャーターから提供された乳粥ちらがゆで体力をつけ、アシユバツタ樹の根元で瞑想めいそうに入り、ついに菩提ぼだい(悟り)を得て、仏陀ぶつだ(悟った人)となった。これより後、アシユバツタ樹は菩提樹ぼだいじゆと称されるようになった。一〇〇〇人を超える弟子の内、シャーリープトラ(舍利弗しゃりほつ)とマハーマウドガリヤーヤナ(目連もくれん)などが有名。釈迦は二十九歳で出家しゆっけし、三十五歳で悟り、四十五年間、布教活動を行つて、八十歳で死亡した』

お釈迦様が布教活動をなされていた頃、わが日本は縄文時代晩期(紀元前一〇〇〇年〜同三〇〇年)の中頃でした。言い換えると、弥生時代前期(紀元前四〇〇年〜同一〇〇年)が始まる直前です。邪馬台国の女王「卑弥呼ひみこ」が中国の魏ぎに使節を送ったのは、お釈迦様の時代より七〇〇〜八〇〇年も後の西暦二三九年のことでした。果たして、女王卑弥呼は、中国のはるか西方に「インドという大国(正確にはマガダ国)がある」ということを知っていたのでしょうか。

## お釈迦様の生涯

仏教伝道協会の『仏教聖典』には、お釈迦様の生涯について「経典」の中に書かれている内容が簡潔にまとめられています。お釈迦様がどのような性格の人であったのかを知る上で最善のものと思います。聖典には、次のような趣旨の文章が書かれています。

なお、この経典には、「マガダ国」——首都はラージヤグリハ（おうしゃじょう王舎城）——の王であるピンピサーラと、その子供で次の王になったアジャータシャトルが登場します。これらの王は紀元前六世紀後半の人物であることが分かっています。したがって、この経典の内容が事実であるとする、お釈迦様は紀元前六世紀に布教活動をされていたと判断することができません。

(一) ヒマラヤ山の南のふもとを流れるローヒニー河のほとりに、釈迦族の都、カピラバ

スツがあつた。その王、シュッドーダナ（浄飯じやうはん）は、そこに城を築き、善政をしき、民衆は喜び従つていた。王の姓はゴータマであつた。

妃みけ、マーヤー（摩耶）夫人は、同じ釈迦族の一族で、コーリヤ族とよばれるデーヴァダハ城の姫で、王の従妹いとこにあたつていた。

結婚の後、ながく子に恵まれず、二十幾年の歳月の後、ある夜、白象が右脇から胎内たないに入る夢を見て懐妊かいにんした。王の一族をはじめ国民ひとしく指折り数えて王子の出生を待ちわびたが、臨月りんげつ近く、妃は国の習慣に従つて生家に帰ろうとし、その途中ルンビニー園に休息した。

折から、春の陽ひはうららかに、アショカの花はうるわしく咲きにおつていた。妃は、右手を上げてその枝を手折たおろうとし、そのせつなに王子を産んだ。天地は喜びの声をあげて、母と子を祝福した。ときに四月八日であつた。

シュッドーダナ王の喜びはたとえようがなく、一切の願いが成就したという意味のシツ  
ダールタ（悉達多）という名を王子に与えた。

(二) しかし、喜びの裏には悲しみもあった。マヤー夫人は間もなくこの世を去り、太子は以後、夫人の妹、マハープラジャーパティールによつて養育された。

そのころ、アシタという仙人が山で修行していたが、城のあたりに漂う吉相を見て、城に  
来り、太子を見て「このお子は長じて家にいられたら世界を統一する偉大な王となり、も  
しまた、出家して道を修めれば世を救う仏になるであろう」と予言した。

はじめ、王はこの予言を聞いて喜んだが、次第に、もしや出家されてはという憂いを持  
つようになった。

太子は、七歳の時から文武の道を学んだ。春祭に、父王に従って田園に出、農夫の耕すさまを見ているうち、すきの先に掘り出された小虫を小鳥がついばみ去るのを見て、「あわれ、生きものは互いに殺しあう」とつぶやき、ひとり木陰に座って静思した。

生まれて間もなく母に別れ、今また、生きもののかみ合う有様を見て、太子の心には早くも人生の苦悩が刻まれた。それはちょうど、若木につけられた傷のように、日とともに成長し、太子をますます暗い思いに沈ませた。

父王はこの有様を見て大いに憂い、かねての仙人の予言を思いあわせ、太子の心を引き立てようと、いろいろ企てた。ついに、太子十九歳の時、太子の母の兄、デーヴァダハ城主スプラブツダの娘、ヤシヨードラーを迎えて妃と定めた。

(三) この後、十年の間、太子は、春季・秋季・雨季それぞれの宮殿にあつて、歌舞管弦の生活を楽しんだが、その間も、しきりに沈思冥想して、人生を見極めようと苦心した。

「宮廷の栄華も、すこやかなこの肉体も、人から喜ばれるこの若さも、結局、このわたしにとって何であるのか。人は病む。いつかは老いる。死を免れることはできない。若さも、健康も、生きていることも、どんな意味があるというのか。」

人間が生きていることは、結局、何かを求めていることにほかならない。しかし、この求めることについては、誤ったものを求めることと、正しいものを求めることとの二つがある。誤ったものを求めることというのは、自分が老いと病と死とを免れることを得ない者でありながら、老いず、病まず、死なないことを求めていることである。

正しいものを求めることというのは、この誤りをさとって、老いと病と死とを超えた、人間の苦悩のすべてを離れた境地を求めることである。今のわたしは、この誤ったものを求めている者にすぎない」。

(四) このように心を悩ます日々が続いて、月日は流れ、太子二十九歳の年、一子ラーフ  
ラが生まれたときに、太子はついに出家しゅつけの決心をした。太子は、御者ぎよしゃのチャンダカを伴い、  
白馬カンタカにまたがって、住みなれた宮殿を出て行つた。そして、この俗世界とのつな  
がりを断ち切つて、出家の身となつた。

このとき、悪魔は早くも太子につきまとつた。「宮殿に帰るがいい。時を待つがいい。こ  
の世界はすべておまえのものになるのだ」。太子は叱咤しったした。「悪魔よ、去れ。すべて地上  
のものは、わたしの求めるところではないのだ」。太子は、悪魔を追い払い、髪をそり、食  
を乞いつつ、南方に下つた。

太子は、はじめ、バガヴァ仙人を訪れて、その苦行の実際を見、次にアーラーダ・カー  
ラーマと、ウドラカ・ラーマプトラを訪ねて、その修行を見、また、自らもそれを実行し  
た。しかし、それらは、結局、さどりの道ではないと知つた太子は、マガダ国に行き、ガ  
ヤーの町のかたわら流れるナイランジャンナー河のほとり、ウルヴェイルヴァーの林の中に

おいて、激しい苦行をしたのである。

(五)それは、まことに激しい苦行であった。釈尊自ら「過去のどのような修行者も、現在のどのような苦行者も、また未来のどのような出家者も、これ以上の苦行をした者はなく、また、これからもいないであろう」と、後に言われたほど、世にもまれな苦行であった。

しかし、この苦行も、太子の求めるものを与えなかった。そこで、太子は、六年の長きにわたったこの苦行を未練なく、投げ捨てた。ナイランジャーナ河に沐浴して、身の汚れを洗い流し、スジャーターという娘の手から乳がゆを受けて、健康を回復した。

このとき、それまで太子と一緒に同じ林の中で苦行していた五人の出家者たちは、太子が墮落したと考え、太子を見捨てて、他の地へ去っていった。

いまや、天地の間に、太子はただひとりとなった。太子は、静かに木の下に座って、命をかけて、最後の瞑想めいそうに入った。「血も涸かれよ、肉も爛ただれよ、骨も腐くされよ。さとりを得るまで、わたしは、この座を立たないであろう」。これが、そのときの太子の決心であった。

その日の太子の心は、まことに、たとえるものがないほどの悪戦苦闘であった。乱れ散る心、騒ぎ立つ思い、黒い心の影、醜みにくい思いの姿、すべてそれは、悪魔の襲来というべきものであった。太子は、心のすみずみまでそれらを追及して、散々に裂さき破った。まことに、血は流れ、肉は飛び、骨は砕けるほどの苦闘であった。

しかし、その闘いも終わり、夜明けを迎えて、明けの明星みょうじょうを仰あおいだとき、太子の心は光り輝き、さとりは開け、仏となった。それは、太子三十五歳の十二月八日の朝のことであった。

(六) これより、太子は、仏陀ぶつだ、無上覚者むじょうかくしゃ、如来にょらい、釈迦牟尼しゃかむに、釈尊しゃくそん、世尊せそんなどの種々の

名で知られるようになった。

釈尊しやくそんは、まず、六年にわたる苦行の間、ともに修行してくれた恩義のある五人の出家者に道を説こうとして、彼らの住むヴァーラーナシーのムリガダーヴァろくやおん（鹿野苑）に赴き、彼らを教化した。彼らは、最初、釈尊しやくそんを避けようとしたが、教えを聞いてから、釈尊しやくそんを信じ、最初の弟子となった。また、ラージャグリハ（王舎城）に入つて、ビンビサーラ王を教化し、ここを、教えを説く根拠地として、さかんに教えを広めた。

人々は、ちようど、渴かわいた者が水を求めるように、餓うえた者が食を求めるように、釈尊しやくそんのもとに寄り集まった。シャーリープトラしゃりほつ（舍利弗）、マウドガルヤーヤナもくれん（目連）の二大弟子をはじめとする、二千余人の弟子たちは、釈尊しやくそんを仰ぎ、その弟子となった。

釈尊しやくそんの出家を憂えて、これを止めようとし、また、釈尊しやくそんの出家によって深い苦しみを味わった父、シュッドーダナ王、養母のマハープラジャーパティー、妃のヤシヨーダラー

をはじめとする釈迦族の人たちも、みな、釈尊しやくそんに帰依きえして、弟子となった。その他、非常に多くの人々が釈尊しやくそんの信奉者になった。

(七) このようにして、伝道の旅を続けること四十五年、釈尊しやくそんは八十歳を迎えた。ラージャグリハ(王舎城)からシユラーヴァステイー(舎衛城)しゃえいじょうに赴おもむく途中、ヴァイシャーリーにおいて病を得、「三月の後に涅槃ねはんに入るであろう」と予言された。さらに進んでパーヴァーに至り、鍛冶屋かじやのチュンダの供養くようした食物にあたって病が悪化し、痛みを押して、クシナガラに入った。

釈尊しやくそんは、城外のシャーラ(沙羅)樹の林に行き、シャーラの大木が二本並び立っている間に横たわった。釈尊しやくそんは、ねんごろに弟子たちを教え、最期のせつなまで教えを説いて、世間の大導師だいどうしたる仏としての仕事をなし終わり、静かに涅槃ねはんに入った。

(八) クシナガラの人々は、釈尊しやくそんが涅槃ねはんに入られたことを悲しみ嘆なげき、アーナンダ(阿

難)の指示に従って、定められたとおりに<sup>しゃくそん</sup>釈尊の遺骸<sup>いがい</sup>を火葬した。

このとき、マガダ国の王、アジャータシヤトルをはじめとするインドの八つの国々の王は、みな、<sup>しゃくそん</sup>釈尊の遺骨の分配を乞うたが、クシナガラの人びとはこれを拒否し、争いが起こった。しかし、賢者ドローナの計らいにより、遺骨は八大国に分配された。その他、遺骸<sup>いがい</sup>の瓶<sup>かめ</sup>と火葬の灰を受けた者があり、それぞれの国に<sup>ほうあん</sup>奉安されて、この世に<sup>だいどう</sup>仏の十の大塔<sup>だいとう</sup>が<sup>こんりゅう</sup>建立されるに至った。

## お釈迦様の教え（ダルマ）

みなさんとともに般若心経の解釈に取り組む前に、何はともあれ、お釈迦様がどのようなことを説かれたのかを、多少なりとも知っておく必要があると考えます。お釈迦様の教えを知らずに般若心経に取り組むのは、「泳げないのに、いきなり大海に飛び込むようなもの」だからです。

お釈迦様の入滅後、その説法は、弟子たちによって、何百年もの間、語り継がれました。そして、今から二〇〇〇年前頃、大乘仏教だいじょうを信奉するインドの高僧たちが、「如是我聞にょぜがもん」(このように私は聞いた)として伝えられてきたお釈迦様の説法を、多くの経典にまとめました。しかし、大乘仏教の経典は、数が多く、しかも漢文で書かれていますので、素人しゅんとには手も足も出ません。

# 途中省略

本編はダウンロード時間短縮のため省略版でお届けしています。

途中省略なしの完全版をご希望の方は製品版をご「購読」ください。

## 著者プロフィール

### 樽井 欣也 (たるい きんや)

昭和22年、福島県船引町生まれ。

埼玉県立浦和高等学校、埼玉大学経済学部卒業。

昭和45年、総合商社「日商岩井」(現在は、ニチメンと合併して、「<sup>そうじつ</sup>双日」に社名が変更されている)入社。鉄鉱石部、インドに4年半駐在(昭和54～59年)、広報室、国際部に勤務の後、退社。

その後、法律、経済、金融を中心に、英日・日英の翻訳に従事。日本翻訳連盟会員。

特に、日本の中央省庁の英訳・和訳の仕事が多い。その他、民間企業では、契約書・年次報告書・環境報告書などの英訳が多い。たとえば、次のようなものがある。

[中央省庁関係]

「APEC 経済展望」の和訳、「世界経済白書」・「経済白書」の英訳(旧経済企画庁)

「新たな基礎年金制度の構築に向けて」の英訳(旧経済企画庁経済研究所)

「財政投融资」の英訳(旧大蔵省)

「通商白書」の英訳(旧通産省)

「国土計画」の英訳(旧国土庁)

「会計監査報告書」の英訳(会計検査院)

「防衛白書」の英訳(防衛庁)

[国連関係]

「年次報告書」・「業務基準書」の和訳(世界銀行)

## 凡人による凡人のための新解釈「般若心経」

---

2006年2月15日 電子出版発行

著者 樽井 欣也

発行者 瓜谷 網延

発行者 株式会社 文芸社

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1

電話 03-5369-3060 (編集)

03-5369-2299 (営業)

<http://www.boon-gate.com>

© Kinya Tarui 2006 Corded in Japan

新 06.02.06 Ladybird 改 06.02.20 Ladybird